

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370776

研究課題名(和文) 戦後東北史の基礎的研究 東北 論の検討を中心に

研究課題名(英文) Basic study of postwar Tohoku: On the research about Tohoku Images

研究代表者

河西 英通 (Kawanishi, Hidemichi)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：40177712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)： 後進東北 は戦後の物語であり、高度経済成長期に生れた。農村から都市への労働力移動の必然性として、最大の農村地帯東北社会の後進性が強調された。農村生活の価値を低め、都市生活の価値を高めるためには、後進地を特定し、先進地の優位を創出する必要があり、後進東北 の創出とはそうした国家的機能の一環として位置づけられた。明治維新时期から敗戦までの 東北 論と、戦後 東北 論とを結合させることで、近現代日本史の新たな全体像が提示できた。

研究成果の概要(英文)： The story that Tohoku region is backward was born in 1960s. At that time Japanese capitalism needed to shift the labors from agricultural villages to cities. So it emphasized that Tohoku is the backward region. By specifying Tohoku as backward and disadvantaged zone, Japanese capitalism produced the superiority of mega city like Tokyo and encouraged people transfer from villages to cities. The invention of 'Backward Tohoku' is one of the functions of Nation-State. Combining prewar Tohoku images and postwar them will draw the new picture of modern Japanese history.

研究分野：日本史

キーワード：東北史 東北論

1. 研究開始当初の背景

(1) 2011年3月11日以降、東北史に対する関心は急速に高まっているが、それ以前より東北史は脚光を浴びていた。北海道・東北史研究会の活動や、北方史に関する出版物(『北方社会史の視座』全3巻、『地域ネットワークと社会変容』、『講座 東北の歴史』全6巻など)は、「中央」の視点からではなく、「北」の視点に立って、エミシ・エゾ・アイヌなどの歴史的主体を再評価し、「辺境」「周縁」としてではなく、広く東アジア・環日本海世界との関係のなかで東北史像を描き直し、日本史像の再構成をめざそうとしている。青森県・三内丸山遺跡をはじめとする考古学上の発見や、古代・中世・近世史研究における国境・民族を越えた視点によって、日本史上の東北の辺境イメージは払拭されつつある。

(2) 近現代東北史研究においても新しい成果が生まれているが、いまだ個別的断片的な域にとどまっている。また、民俗学においても「東北学」という新しい動向が見られ、東北社会の可能性が探究されているが、総じて、明治維新における「敗者」、近代化の遅れ、他地域との経済的格差などを背景に、日本近現代史における東北の基本イメージは後進地色が強い。東北史をめぐる前近代史研究の「明」と近現代史研究の「暗」というギャップを指摘せざるをえない。

(3) この研究ギャップの要因として、前近代史においては東北史の客観的・実証的研究が着実に進んでいるのに対して、近現代史においては東北史にまつわる「負」のイメージ凶作・飢饉・災害・寒冷・貧困・方言などの先行があげられることから、応募者は基本的な研究視点として、《国民国家日本の形成期とされる明治時代を対象に、多様で豊かでさえあった東北が、近代的価値基準の下で、いかに後進・辺境・未開を連想させる単一的な空間領域＝東北として成立させられてきたかという問題を、東北観・東北論・東北意識などの東北論の視点から再検討すること》を設定してきた。これまでの主な研究成果として、イ) 単著：『近代日本の地域思想』(窓社、1996年)、『近代日本形成期における「東北論」の基礎的研究』(1998～2000年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(C)) (2) 研究成果報告書、2001年)、『東北 つくられた異境』(中央公論新社、2001年)、『続・東北 異境と原境のあいだ』(中央公論新社、2007年)、『東北を読む』(無明舎、2011年)、ロ) 編著：『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ』(岩田書院、2005年)、『北方社会史の視座』第3巻(清

文堂、2008年)、『地域ネットワークと社会変容』(岩田書院、2008年)、『周辺史から全体史へ』(清文堂、2009年)、ハ) 海外調査・科学研究費補助金：2005年度文部科学省海外先進教育研究プログラム：研究課題「地域史研究の方法論に関する国際的比較検討」(プリンストン大学東アジア学科)、2007～2009年度科学研究費補助金・基盤研究(C)：研究課題「日本史学の国際的環境に関する基礎的研究 戦前イェール大学を対象として」、2011年度国際交流基金・カリフォルニア大学サンタバーバラ共同プログラム：研究課題「日本のナショナリズム」、がある。

(4) これらの研究成果から明らかになった点は、明治維新以降の近現代史における東北の歴史的位置は、後進性や未開性、総じて異境性にとどまらず、戦時体制・総力戦体制下において原境性への急速な傾斜が東北の地域内外に見られたという事実である。帝国としての海外膨張を続ける「日本」の原境として、中心として、基底として、深層として、すなわち「日本」そのものとして機能していたのである。「日本」を最深部から規定・照射・構成する機能を持ったという意味で、東北は「深日本」とも呼ぶべき根底的・根源的・中核的な空間世界として存在した。

(5) すなわち、1910年代から1945年までの東北は、異境から原境への移行を見せ、とくに戦時体制・総力戦体制下には「深日本」としての原境性を発揮したが、敗戦によってそれが解体・混乱することで、東北の位置エネルギーは急落し、「深日本」としての地場は霧消する。東北にとって戦後とは、ふたたび後進性と未開性のレッテルを貼られる時代、ふたたび異境として生きる時代の到来だったといえる。2011年3月11日大震災はそうした状況の中で東北を襲ったのである。

2. 研究の目的

(1) 第一は、東北と東北史をめぐる後進イメージの直接的源泉を戦後社会に求めようとした点である。近世後期に見られた東北＝異境・異域イメージを基盤に、幕末維新时期における奥羽越列藩同盟の軍事的敗北によって、東北には「近代的未開」のイメージが付与されたが、近代化のなかでその進行は単線的なものではなく、ジグザグな行跡を示す。昭和戦前期には東北＝「日本」の原境として指定されるに至る。つまり、現在のわれわれが東北に抱く後進イメージは戦後復興期・高度経済成長期に創出されたきわめて戦後的な物語といえよう。

(2) 第二は、東北と東北史をめぐる戦後物語は東北の記憶と来歴をも再構成することとなるが、その際、大きな役割を果たした戦後歴史学を批判的に検討する点である。現代歴史学への転換期にあたる今日、あらためて戦後歴史学の問題点が論ぜられているが、本研究では戦後歴史学の象徴的な蹉跎として、東北史の認識如何を問うことになる。

(3) 第三は、東北と東北史をめぐる後進イメージという大文字の歴史認識の背後・水面下で語られていた東北内部の小文字の東北論の多様な実相を明らかにしようとする点である。すでに、岩手県と福島県において本研究の試験的調査を進めているが、地域における東北論あるいは郷土論の視界はきわめて豊かである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は全3カ年で、第一年目と第二年度の2カ年間は毎年3県ずつ、東北6県における東北論の動向を、新聞・雑誌・同人誌などの地域メディアの分析を、実地調査を踏まえて、中心的に行った。

(2) 第三年目は隣接する人文地理学の講座・シリーズにおける東北論の抽出も行った。さらに補充調査および研究全体のまとめを行った。

(3) また全期間を通して戦後歴史学における東北論の足跡を代表的な講座・シリーズ・全集・著作集などを対象として集中的に分析した。主な分析対象は、戦後(1970年代半ばまで)出版された東北各県の県立図書館等に所蔵されている刊行物および通史的著作物である。

4. 研究成果

(1) 本研究「戦後東北史の基礎的研究 東北論の検討を中心に」は、東北=後進地という表象・言説が、戦後日本社会において、再創造された戦後の物語であることを多角的に明らかにした。この視点から、日本史像総体の脱構築をめざす方向性が確認された。

(2) 東北地方の後進地イメージは明治維新以降に形成され、戦前の戦時体制・総力戦体制下に噴出したマジョリティ意識・中心地意識・日本意識によっていったん消失・無化するが、敗戦後の復興期にあらためて付与・投影・拡大され、さらに高度経済成長期の原日本ふるさとイメージの固定化を経て、今日まで続くことになる。このことは2011年3月11日に東北地方を中心におこった東日本大震災によっても明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

河西英通、書評・井上勝生『明治日本の植民地支配』、査読無、新しい歴史学のために、第287号、2015、pp.37-44

河西英通、書評・雨宮昭一『戦後の超え方』、査読無、歴史評論、第780号、2015、pp.105-109

河西英通、私の自由民権研究、自由民権、査読無、第27号、2014、pp.16-20

河西英通、共生する世界文化、比較日本文化学研究、査読無、第7号、2014、pp.217-226

河西英通、伝承と歴史学、語言文化比較研究、査読無、第2号、2014、pp.43-50

河西英通、われわれは東北史になにを学ぶか、歴史学研究、査読無、第909号、2013、pp.18-21

[学会発表](計 5件)

河西英通、Moving History: Emotion and Social Movements in Modern Japan, Association of Asian Studies in Asia 2015, 2015年6月22日、中央研究院(中華民国・台北市)

河西英通、福島論、福島フォーラム「歴史から見つめ直す「生存」の場」、2015年2月28日、福島市コラッセふくしま(福島県・福島市)

河西英通、Tōhoku – Japan's Constructed Outland, シンポジウム JAPANESE STUDIES, 2014年1月23日、インドネシア国立大学(インドネシア・デポック市)

河西英通、暴力・軍事力の分散と集中のなかの『長期の19世紀』、シンポジウム「グローバル・ヒストリーとしての『長期の19世紀』」、2014年1月11日、筑波大学(茨城県・つくば市)

河西英通、近代東北が見た日本、シンポジウム「国際日本学の方法に基づく日本意識の再検討」、2013年11月15日、法政大学(東京都・千代田区)

[図書](計 9件)

河西英通、BRILL、*Tōhoku: Japan's Constructed Outland*, 2015, 178pp

研究者番号：

河西英通、他、吉川弘文館、*地域のなかの軍隊* 8、2015、pp.106-123

(3) 連携研究者 ()

河西英通、他、吉川弘文館、*地域のなかの軍隊* 3、2014、pp.106-134

研究者番号：

河西英通、他、清文堂、*軍港都市史研究*、2014、pp.241-277

河西英通、他、清文堂、*講座東北の歴史*、2013、pp.298-316

河西英通、他、岩田書院、*北信自由党史*、2013、pp.473-502

河西英通、他、岩田書院、*中国宋代の地域像*、2013、pp.345-369

河西英通、他、大月書店、*「生存」の東北史*、2013、pp.53-100

河西英通、他、岩田書院、*グローバル化のなかの日本史像*、2013、pp.149-174、315-323

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河西 英通 (KAWANISHI HIDEMICHI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40177712

(2) 研究分担者

()